だい好きな本を　いっしょに　じっくり読もう

◆ 総合的な図書館ボランティアが盛んな十和田市 ◆

十和田市立三本木小学校　図書館ボランティア

この取組を紹介したわけ

十和田市での読み聞かせ活動率は、小学校１１校/２１校　52.4％です。さらに、実施校の内、６校が図書館支援も行っています。読み聞かせ活動を実践している市町村において、総合的な図書館支援を行っている学校数が目立つのが十和田市です。

十和田市において、総合的な図書館支援活動はどのように広がりをみせたのか。どのような活動を行っているのかを三本木小学校を例に紹介します。

このような活動です

三本木小学校では、現在２４名が図書館ボランティアとして活動しています。そのうち保護者が１６名、他は卒業生の保護者や活動に賛同していただいている方々です。活動は主に学校の図書委員会の支援ですが、独自のものもいくつかあります。以下に活動内容を紹介します。

活　　動	曜日・時間	内　　容	その他
貸し出し	毎週 火・金曜日 午後２時１５分 ～４時	・本の貸し出し・返却 （コンピューター２台使用） ・本の修理 ・図書室でのマナー指導 ・新着図書の受け入れ手伝い	・日誌に来室者数・連絡事項を記入 ※昼休みは図書委員会が担当
読み聞かせ	毎週金曜日 ８時 ～８時２０分	・各自の選書で、各教室１～２名で読み聞かせ。 （読む本の冊数は時間内で自由。） ・本や作者の紹介	・日誌に担当教室、書名、感想などを記入
図書室装飾	年４回程度 （季節の変わり目に） 午前１０時 ～１２時	・図書室の窓や壁面に季節の工作品等をレイアウト。	
読書集会の読み聞かせ	年１回（１２月） １５分程度	・全校児童対象に生演奏やプロジェクターの効果をつけた読み聞かせ	・練習は１回２時間を３～４回、１１月頃から準備

活　　動	曜日・時間	内　　容	その他
研修旅行	年１回 １０月頃 ４時間程度	・ボランティアの学習と親睦をかねての日帰り旅行。	
読書週間 ～栞作り	年１回昼休み ２週間程度	・シーラーをつかった栞作りの手伝い・指導。	※主体は図書委員会なので準備や片付けの手伝い
情 報 紙 「つみき」 発行	年４～５回 不定期	・保護者へ向けての活動報告・情報発信。	

毎年４月にボランティア募集のプリントを配布し、５月の組織会で、名簿と活動計画を確認します。そして、各活動毎に班長を決め、班長中心にみんなで協力し合って進めていきます。３月に反省会をし、次年度の代表のみを決めて、１年の活動を終えます。全員が顔を合わせるのは、５月と３月の会議の２度だけですが、連絡袋・メール・ＦＡＸ等を駆使し、コミュニケーションをとるようにしています。

本の貸し出しの様子

学校の日課表では、毎朝８時から１０分間の朝読書の時間が設定されています。上記のように週２回の定期的な貸し出し業務を行っているので、児童が常に新しい本を借りておくことが出来ます。毎朝の読書の時間に、本を選んだり、読み終わったので読む本がないなどということがなく、三本木小学校の朝読書を充実したものとするためには今では欠かせないものとなっています。

本の修理

このように進めています

この活動は特別な資格とか講習を受けなければならないということがありません。誰でもその気になればできるということをアピールし、ボランティアの募集をします。

活動（貸し出し・読み聞かせ）の計画は各学期毎に実施予定表を事前に配布し、活動できる日を記入してもらいます。それをもとに一覧表を作成して調整しています。ボランティアの方のお子さんが病気になったなどの理由で急に活動できなくなることもありますが、無理せず、できるときにということをみんなで確認していますので、誰かに連絡すればよいということになっています。

予算がないので、様々な消耗品などは学校の図書部・図書委員会から材料をいただきながら行っています。お金のかかる派手なものはできませんが、昨年度までのものを再利用するなど、工夫しながら図書室環境を作ってます。いろいろなことに図書担当の先生方が相談に

のってくれるので、とても心強いです。

ボランティア日誌は、参加者、内容、感想などを記録します。日誌は、活動日に教務の先生から受け取り、帰りにまた教務の先生に返します。貸し出しのときは、クラスごとの来客数、子どもたちに連絡してほしいこと、活動で不具合があったことを記入し、学校に対応してもらいます。また、読み聞かせのときは、担当教室と書名・感想を記入し、次回以降に、読み聞かせの本を選ぶときの参考にしています。

本の借り方・返し方のマナー

貸し出しの時間には、帰りの会の前や、終わったすぐ後などに学級担任の先生がクラスの子どもをまとめて連れてきて、借りる本のアドバイスをしたり、借り方や返し方のマナーなどを指導してくれています。

図書館ボランティアを進める上で欠かせないのが、学校との協力です。

図書貸し出しカード

三本木小学校では、朝読書の時間の１０分間は、先生方も教室にいて一緒に読書をします。図書館ボランティアの読み聞かせのときはさらに１０分延長してもらい、先生も一緒にお話を聞いてくださいます。また、ボランティアが急に休んだときなどは、学校の教務主任の先生や学級担任以外の先生がピンチヒッターとなってやってくれます。子どもたちにとっては、これも楽しい一コマのようです。決してボランティアに任せっきりにすることがないところがよいところです。

学校の分掌の中に「図書館ボランティア担当」として教務主任の先生が明確に配置されています。読み聞かせと貸し出しの分担希望調べや調整・日誌の管理は先生の方で担当してくれて活動し易いよう配慮していただいています。

ここが聞きたい　お答えします

Q：　１０年以上活動が続いていますが、どのようなことに気をつけて人材を確保していますか。

A：　誰でも、いつでも、無理しないで、しばられないで、来られるときに、自分が楽しいと思う活動をということを心がけています。また、新しいメンバーが自分の居場所を作られるように、中に入れる雰囲気を大切にしています。

これまでのみちのり

朝の読み聞かせの様子

平成８年、県の委託を受けた十和田市教育委員会が、図書館司書を講師に図書館ボランティア講座を年５回行いました。その講座を三本木小学校のＰＴＡ研修委員会のお母さん方が受講していました。十和田市教育委員会社会教育担当者が学校側に図書館ボランティアを組織してみないかと持ちかけ、十和田市教育委員会がバックアップするということで３学期から本の貸し出し・返却を開始しました。やってみたら楽しく、そう難しいことではない、学校としても助かるということが成果としてあげられました。そこで、さらに活発にしていきたいということから、平成９年度に保護者全員にボランティア募集の案内を出したところ、１２～１３人の応募があり春からスタートしました。平成１２年には、読み聞かせボランティアもスタートしました。

図書館ボランティアを新しい取り組みとして広げていきたいと考えた十和田市教育委員会は、市内の学校のＰＴＡ研修会や参観日などで、三本木小学校の活動の様子をビデオで紹介しました。それから、学校主導あるいはＰＴＡ主導で図書館ボランティアが学校ごとに組織され、現在に至っています。県内の他の地域と大きく違うところは、十和田市の場合は、図書館ボランティアが先でその後読み聞かせボランティアが行われるようになってきたということです。

この活動を行って　成果・課題、そしてこれから

○成果

・子どもたちに本を読む習慣がついてきている。
・どのクラスも、絵のない長いお話でも集中して聞けるようになった。
・ボランティアをすると、生活に張りが出る。
・街で会った子どもとの挨拶やコミュニケーションが楽しい。
・学校に対する理解が深まった。
・ボランティア同士で情報交換ができる。
・ボランティア自身も本を読むようになった。

○今後の活動

・これからも長く長く続けていきたい。
・保護者以外の地域の方にも参加してもらえるようにしたい。
・図書館ボランティアのＯＧで図書館支援や読み聞かせのサークルを作り、他の学校に行って活動したりして、他校のグループとの交流を図りたい。

一人一人に学ぶ楽しさを

◆ 保護者がすべての学級で協力・支援！ ◆

十和田市立北園小学校　学校支援ボランティア（全学年）

この取組を紹介したわけ

十和田市立北園小学校は、学校への保護者の協力がとても盛んな学校です。

１０年くらい前に、保護者による図書ボランティアが組織され、それ以来活発に活動しています。その後、ベルマークボランティアが活動を始め、今年度から学校支援ボランティアが組織され活動を始めました。

日常的に保護者が来校して活動し、子ども、教職員、保護者、そして、地域の人にも活動が認知されています。学校の営みと保護者の活動が巧みに調和して手を取り合い、子どもによりよい学習環境をつくろうと活動しています。

このような活動です

保護者で組織されている２３名の学校支援ボランティアが、授業者の要請に応えるかたちで、教師の目や手が届きにくい場面で、子どもたち一人一人に対応するために支援します。

教室に入るボランティアの数は１～７人程度と授業の内容によって違いがあるものの、複数で支援することが多く、要請があれば基本的にすべての学級、すべての授業に協力、支援します。

６月から１２月までの活動状況は、家庭科、図工科、国語科の毛筆などの技能教科を中心に計４２回、延べ１８５人の活動があり、夏休みには国語科、算数科の補習授業を支援しています。

家庭科のミシンがけの授業では、教師が進める普段どおりの授業の中で、流れに合わせて子どもたちの作業に目を配ります。ボランティアの判断で、作業への手助けやアドバイスが必要な子どもに支援します。授業の中ではボランティアに教師から特に指示はなく、教師とボランティアの事前

準備と信頼関係のもと、円滑な支援が行われています。図工科、国語科の毛筆の授業においても同様に行われています。

夏休みに行われた補習授業においては、国語科と算数科の授業に支援をしました。丸付けボランティアが中心ですが、一人一人に目を配り、理解ができるように、図などを使って説明などもしています。

ボランティアは自然に授業の中に、そして、子どもたちの中に入り、自然に作業に参加し、自然に支援しています。

国、県、市からの補助金等は受けないで実施しています。

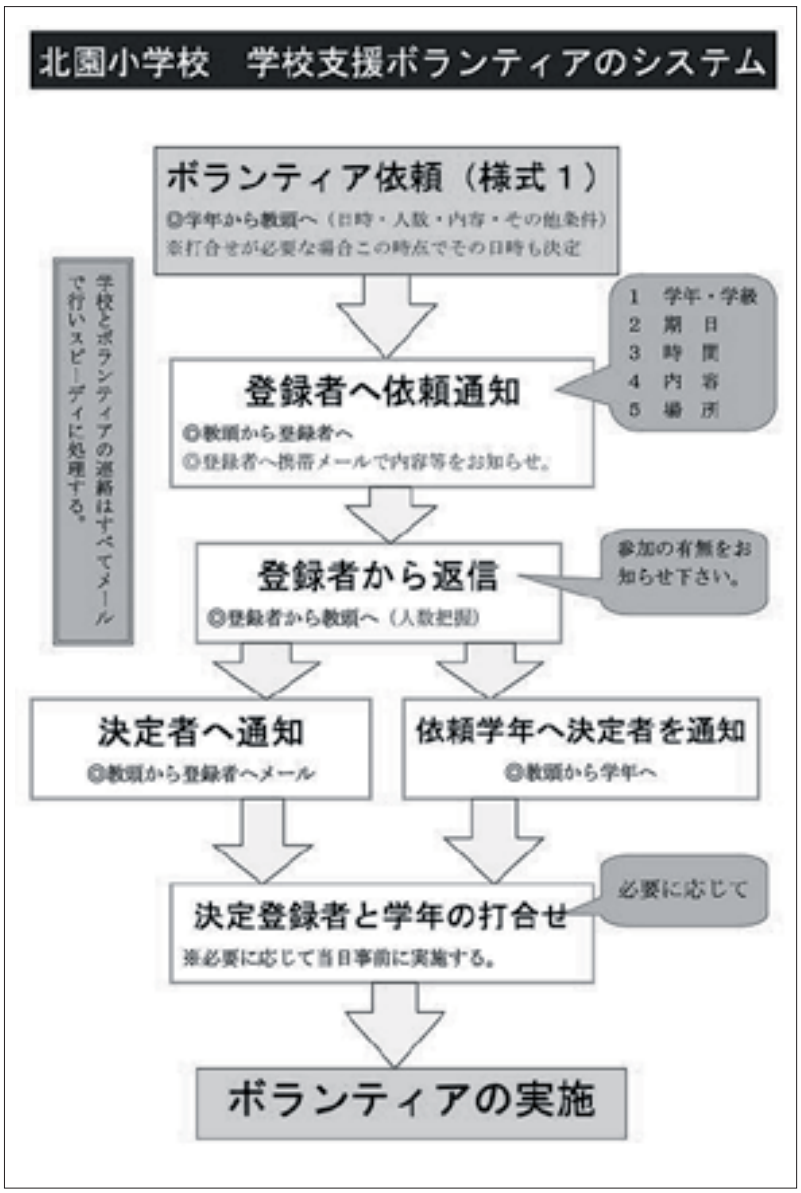
このように進めています

教頭が窓口になっています。今年６月に全保護者に学校支援ボランティアを文書で募集し、全校で２３名のボランティアが登録されました。

校内の空き教室を利用して、ボランティアルームをつくり、ボランティアの会議や待機場所にしています。

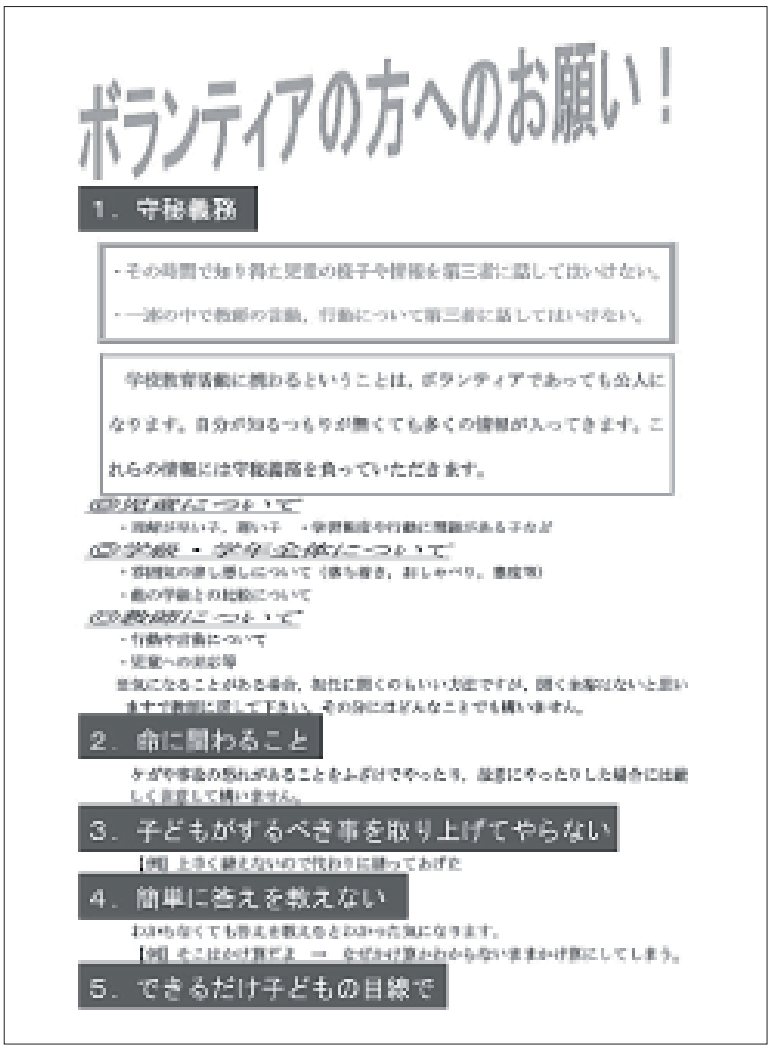
教師側からボランティアの要請があった時点でボランティアが始まります。日時、人数、内容などが要請され、教頭からメールでボランティアに依頼をします。学校とボランティアの連絡はすべてメールを使って行います。

教頭のところで調整、決定を行い、ボランティアと教師側に連絡をします。必要があれば事前の打ち合わせを行います。６月の開始当初には、事前の打ち合わせを行っていましたが、現在では、同じ内容であれば、事前の打ち合わ



せがなくとも当日の簡単な打ち合わせで支援できる状況です。また、ボランティアは教室にとどまらず校外学習においても協力していただいています。そのためボランティアの方々は保険に入っています。

ボランティアの募集は、現在はＰＴＡに限っておこなっており、地域の人のボランティアを受け入れてはいません。とても協力的な地域であるため、地域からボランティアを募集すれば、たくさんの協力を得られると思いますが、事務処理の量を考えると、専任で作業する人が必要になってきます。また、受け入れたときの個人情報などの守秘義務の徹底という点で解決しなければならない面もあるため現段階では実施できないでいます。



ボランティアの方へのお願い！

1．守秘義務

・その時間で知り得た児童の様子や情報を第三者に話してはいけない。

・一緒の中で教師の言動，行動について第三者に話してはいけない。

学校教育活動に携わるということは，ボランティアであっても公人になります。自分が知るつもりが無くても多くの情報が入ってきます。これらの情報には守秘義務を負っていただきます。

①児童について

・理解が早い子，遅い子　・学習動機や行動に問題がある子など

②学校・学年企画について

・学習環境の珍しさについて（教与書き，おしゃべり，教授等）

・他の学級との比較について

③教師について

・行動や言葉について

・児童への対応等

疑問になることがある場合，当然に聞くのもいい方法ですが，聞く余裕はないと思います。教師に尋ねて下さい。その分にはどんなことでも構いません。

2．命に関わること

ケガや事故の恐れがあることをみかけてやったり，故意にやったりした場合には厳しく注意して構いません。

3．子どもがするべき事を取り上げてやらない

【例】上手く結べないので代わりに結ってあげた

4．簡単に答えを教えない

わからなくても答えを教えるとわかった気になります。

【例】そこはかけ算だよ　→　なぜかけ算かわからないままかけ算にしてしまう。

5．できるだけ子どもの目線で

そして、北園小学校で学校支援ボランティアが順調に進んでいる要因として、第一にあげられることは守秘義務の徹底です。ボランティア登録時と説明会の場で、事前にボランティアの方々に学校での活動で知り得たことは他言しないように確認し徹底しています。このことが保護者や教師、地域の人にも活動が認められている大きな要因になっています。もう一つの要因として、メールを活用しての連絡が、ボランティアとの連携を迅速に、そして、確実に行うすべとなっています。例えば、前日に急な依頼があっても、その日の内に依頼と返信を受けて依頼者に伝えることができます。こういった対応の早さがメールシステムの強みです。

これまでのみちのり

学校での話し合いの中で、学校支援ボランティアを実施することがまとまり、教頭が中心となって、学校主導で計画が進みました。学校関係者に周知と理解を求め、ボランティアを募集し、今年６月から始めることができました。

ボランティア開始後、活動していただいた方々から「とても楽しい」という声をいただきました。その後、ボランティアの方々からの声がけによりボランティアの輪が広がり現在に至っています。今のところ大きな問題や課題はありませんが、ボランティア活動を長く続けて行くために、ボランティアが『楽しい』という気持ちを味わうことが大事だと考えています。子どもたちも教師もボランティアにとっても『楽しい』活動にするために頑張っています。ボランティアの活動の充実に、大きな役割を果たしているのが、学校の中の余裕教室を活用して設置したボランティアルームです。図書ボランティア、ベルマークボランティアと一緒に使用していますが、ボランティアの存在場所として大きな役割を果たしています。

この活動を行って　成果・課題、そしてこれから

この活動を行ってみて、子どもたちに現れた変化は、『学力の向上』です。学力といっても点数だけではなく、意欲を含めて大きな向上が見られます。また、学校の様子を保護者に理解してもらえるようになり、学校の実情を内側から理解していただいていると感じています。そして、教師側としても、当初少しの抵抗を感じていた部分がありましたが、技能教科においては、とても有効であり効果があると確信できました。また、ボランティア側としても、参加することにより子どもを客観的に見ることができ、自分の子育ての参考にもなり、感謝されることによって充実感を感じています。すなわち、この活動は、子ども・学校・保護者すべての人にとって価値がある活動となっているということです。

６月から始まって現在まで、予算措置や人的支援もありませんが価値ある活動だということがはっきりしていますので今後も活動の充実を図りたいと思います。本校の方針の中に「学校経営」ではなく「教育経営」という言葉があります。よりよい教育活動のために学校独自ではできないこと、地域や保護者の協力によって更に充実できることが増えてきていると考えています。学校支援ボランティア活動その一例として評価を受け、学校と地域が一体となった教育の実現に向けたいと思います。

地域の子どもは地域みんなで育てる

保護者や地域の方々とのふれあいで、コミュニケーション能力をつける

東北町立小川原小学校　学校支援ボランティア

この取組を紹介したわけ

東北町では、蛯沢小学校と上北小学校の余裕教室を利用して、高齢者対象の講座を開いたり児童との交流会を持ったりしています。また、平成２０年度から放課後児童クラブを放課後子ども教室に全て切り替え、さらに、全ての子ども教室を学校内の余裕教室で開催しています。このように、東北町は、学校の余裕教室を様々な形で活用し、地域の方々が学校に来やすくなるような雰囲気作りを通して、地域ぐるみで子どもを育てる取組を行っています。

その中で、放課後子ども教室で音読の指導をする「エコ塾」の活動など、多くのボランティアが学校に関わり、また、平成２０年１０月から学校支援地域本部事業に取り組み始めた小川原小学校を紹介します。

このような活動です

小川原小学校では、学校支援地域本部事業に取り組む以前から様々な支援を受けていましたが、学校支援コーディネーターが配置になったことによって、学校のニーズに沿ってボランティアを募集し、新たな学校支援の取組も行われてきています。今年４月から行われた学校支援ボランティアは以下の通りです。

（１）エコ塾。毎週金曜日午後に読み聞かせをしたり、宿題や音読をしています。
（２）体力テストの補助。保護者９名に50m走のスターターや上体起こしの計測などをやってもらいました。
（３）秋の農業体験（校外学習）の補助をします。
（４）安全パトロール隊の活動をします。
（５）世代交流。小川原地区の老人会の方々と昔遊びをしたり、なべっこだんご作りを行います。
（６）クラブ活動での指導。お花・茶道や料理を教えています。
（７）部活動の指導を行います。
（８）教科指導や道徳の授業での支援。今年度は、地域の方がゲストティーチャーとして、

３年生道徳と６年生社会の学習で支援しました。

（９）米作り。学区の農家や老人クラブの協力を得て、田植え、稲刈り、脱穀の体験をしています。

（10）小川原湖音頭の指導。地域の方５名から教わりました。

（11）網引き。地元の漁師や保護者の協力を得て行っています。

このように進めています

学校と地域を結ぶ窓口教員である教頭が中心となって学校支援ボランティアを進めてきましたが、今は学校支援コーディネーターも加わり、相談しながら行っています。学校支援コーディネーターの机は先生方と打ち合わせしやすいように職員室にあります。また、学校に来たボランティアの方々のためにボランティアルームを設置しています。

先生とボランティアの方々の打ち合わせの時間をなるべく少なくする工夫として、詳しい内容を書いたチラシでボランティアを募集をします。打ち合わせは、当日行い、事前に集まって打ち合わせをしたりすることはしていません。そういう所で、先生方とボランティアの方々の負担軽減を図っています。

ボランティアの方々へのお願いは、「ボランティア活動をする際の留意点」というプリントにまとめてあります。また、児童に対しては、ボランティアの方々には、困ったことがあったら恥ずかしがらないでどんどん話すことと、挨拶や言葉遣いをきちんとすることなど、先生に接するのと同じように接することを指導しています。

目立つところに、「ボランティアコーナー」という掲示板を新設しました。保護者や来校した方々に紹介して、さらにボランティア活動を活発化させたいという事と、児童に感謝の気持ちを持ってもらいたいという二つのねらいをもっています。

ここが聞きたい　お答えします

Q：　たくさんの方々がボランティアとして活動していますが、学校と地域の連携がうまくいっているわけを教えてください。

A：　小川原小学区は、以前から学校と地域が一体となった地区です。例えば、小学校の運動会では、子どもが在学していないお年寄りを地域評議員が学校まで車に乗せてきてくれ、お弁当はＰＴＡの予算から出します。そして、地区ごとにテントを張って、子どもが在学しているいないにかかわらず地域みんなで運動会を楽しむということが今でも続いています。また、３世代４世代が一緒に住んでいる家庭が多く、お年寄りの言うことを聞き、敬い、大事にするという風土があり、家庭の教育力がしっかりしている地区です。このようなことから、地域で学校を支えていくのが当然という意識が高く、学校支援ボランティアが活発に行われてきたのだと思います。

この活動を行って　成果・課題、そしてこれから

○成果としては次の３点があげられます。

①授業や行事のねらい達成のために、ボランティアが大変有効である。

②児童とボランティアの方々との温かい交流ができる。

③顔見知りになったことで、地域コミュニティの輪が広がり、地域から児童を見守ってもらえる。

◇成果の具体的な例として◇

例１【校外学習：児童の引率補助】

①運搬車両などの危険から子どもたちを守ることができた。

②トイレまでの距離があったため、教師だけの引率では大変だったと思うが、ボランティアの方々のサポートがあったので助けられた。

③動物をスケッチする場合など、各ポジションにボランティアの方々が付いてくれたため、子どもたちが自由に行動できた。

例２【世代交流（昔遊び）】

①世代に関係なく、子どもたちと地域ボランティアの方々が昔遊びを通して仲良くなれた。

②子どもたちは、ボランティア（お年寄り）の方々が器用に道具を使いこなしている姿を見て、ボランティア（お年寄り）の方を尊敬したようだった。

③子どもたちからもらったプレゼントをボランティアの方々がとても喜んでくれた。教えてもらった子どもたちも感謝の気持ちを持ち、プレゼントをもらったボランティアの方々も感謝の気持ちを持ち、両方にとって良い活動となった。

④どこの孫か、どこの祖父母かをお互いに知る機会となり、終始お互いに笑顔が絶えず交流することができた。

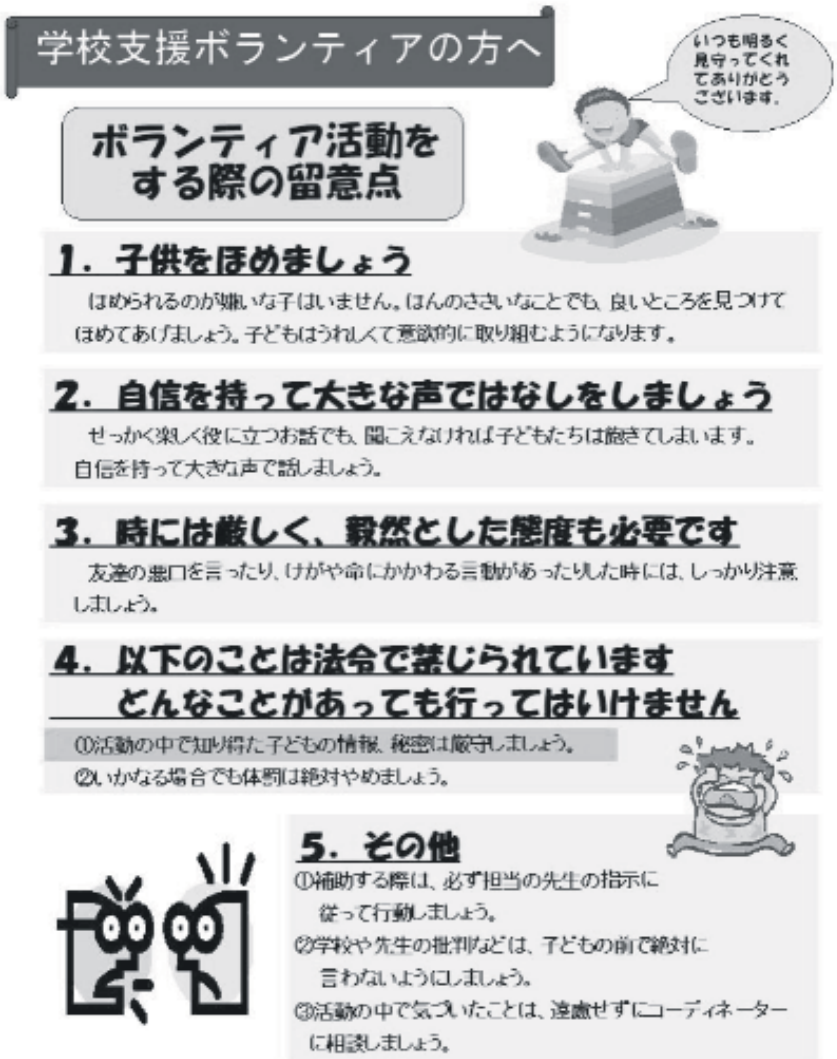
○課題

今後、さらに多くの地域の方が学校支援ボランティアを通して学校教育に関わってもらうようにしていきたいのですが、学区３６０戸に毎回周知していくのは大変です。学校からの要望を地域にどのように発信していけばよいか検討中です。

○これから

学校支援コーディネーターが配置になって日が浅いこともあり、ボランティアは今のところ学校主導で行っています。今後は、学校支援コーディネーターが中心となり地域の方々のできることを生かして学校に関わってくれるような地域の人材を探していきたいと思います。

学校規模からいっても、必ずしもボランティアがいなければ学習や行事ができないというわけではありません。けれども、ボランティアとして学校に来ていただくことによって、保護者や地域の方々が学校や子どもたちの様子を知ることができるということと、児童がボランティアの方々など多くの人と接することによって、コミュニケーション能力を身につけることができるということから、今後も積極的にボランティアの方々の協力をお願いしたいと考えています。そして、学校に保護者や地域の方が入ることの効果を大いにご理解いただき、学校と家庭、地域の絆をさらに深めていきたいと思っています。



ボランティアの方々にお願いしたいことを、紙にまとめて、打ち合わせの時に、説明します。校長・教頭と相談しながら、コーディネーターが作成しました。

連続５日間の本物体験

十和田市内６４事業所で、全２年生２１２名が地域に学ぶ！

十和田市立三本木中学校　三中トライやるウィーク（２学年）

この取組を紹介したわけ

十和田市立三本木中学校は、保護者の理解と協力のもと、平成１２年度から（９年目）地域の事業所の協力を得て、２年生全員を対象とした、１週間（連続５日間）の体験学習『三中トライやるウィーク』を行っています。

『三中トライやるウィーク』は、ひとときの見学的な体験ではなく、自分の生き方を見いだせるような本物の体験をさせて子どもたちを育成しようという活動です。また、『トライやる』という言葉の中には、『学校』、『保護者』、そして、『地域』の三者が手を取り合った関係、『トライアングル』の意味も込められています。

このような活動です

現在は、中学校３年間を通した総合的な学習の時間の２学年の授業に位置づけられ、『十和田市の営みを理解しよう』のテーマのもとに行われています。

市内の事業所（現在登録事業所は７６ヶ所）で２年生全員が活動します。事業所の業種は、金融、製造業、医療、福祉、販売、建築からサービス業など多種多様であり、各事業所の通常業務の中に生徒が参加します。生徒は、参加する事業所の日程にあわせて活動し、自宅から直接事業所や活動場所に移動し、活動が終わるとそのまま自宅に戻ります。一週間（５日間）は基本的に学校に登校することなく、事業所に通います。

活動中は事業所で行われている業務に大人と一緒に取り組みます。活動内容は、事業所によって異なりますが、

なるべく事業所特有な体験活動を入れてくれるようにお願いしています。事務処理（作業）から力仕事まで貴重な体験をあたたかいまなざしと、きびしい指示のもとに行います。

『三中トライやるウィーク』は、事業所に通う５日間の活動だけでなく、活動に向けての準備と終わってからのまとめ活動までを含めて一つの活動と考えています。一連の活動を通して子どもたちを育成します。

このように進めています

三本木中学校の担当者は、校務分掌の中に特活指導部・豊かな心の教育担当（トライやるウィーク）として位置づけられ、担当者を中心に活動しています。全体計画、文書等の発送や教職員への周知などは担当者が行いますが、全職員が事業所と関わりを持ちます。また、ＰＴＡで組織された三中トライやる・運営委員会があり実施・協力の母体になっています。

４月に担当者から全体計画が示されると、全職員が一人あたり２～４つの事業所を担当し、電話や直接出向いての連絡・調整等を行います。今年度のトライやるの実施を伝え、指導ボランティア登録の要請と確認を行い、打合せの日程を決定します。その後、担当職員が直接事業所を訪問し詳細を説明し、実施内容を確認します。

指導ボランティア登録事業所が確定した後、その中から２学年の職員が中心となり生徒の活動場所を決定し、活動するに当たっての事前指導等を行います。保護者へは行事の説明と協力依頼を参観日等で行い、トライやるウィーク実施前に担当職員、生徒、保護者で事業所を訪問し、子どもたちの紹介や意志の表明、保護者の挨拶、最終的な時間、服装、持ち物などの活動内容の確認を行います。

５日間の実施期間中は、生徒は自宅から活動場所へ直接移動し、活動が終了するとそのまま自宅へ帰ります。通学区域ではない遠い事業所もありますが、事前に経路を確認し保護者と相談して移動することになります。自力では通うことができない場合などは、保護者の理解と協力が欠かせません。

各事業所での活動内容は、各事業所にお任せするかたちでお願いしています。事業所の日々の業務に沿ったかたちで、中学生に合わせた活動プログラムを作ってもらっています。安全

面に一番配慮していただきながら最大限の協力をしていただいていますが、社会人としての基本的な作法については、厳しく指導していただいています。

５日間の活動が終了すると、「活動のまとめ記録集」という冊子を発行します。事後指導を行い、後日、担当職員、生徒、保護者で事業所を訪問し、お礼と感想を伝え、この体験の成果を事業所の方々に直接感じていただいています。また、お世話になった方々に感謝の意を込めて年賀状を作成し、送付して活動が終了します。

ここが聞きたい　お答えします

Ｑ：　活動期間中の事故等などに備えてどのような対応をとっていますか。

Ａ：　活動期間中の欠席や事故等などが起こったときの連絡経路や対応に関するマニュアルを作って事業所との打ち合わせ時に確認しています。また、もしもの事故等が起こったときは、ＰＴＡとの共催事業のためＰＴＡ安全互助会と日本スポーツ振興センター災害共済で対応のほか、トライやるウィーク期間だけの社会奉仕活動・校外活動による総合補償にも加入して備えています。

これまでのみちのり

平成１０年に兵庫県で全県をあげて『トライやるウィーク』が始まりました。これは平成７年に起こった阪神・淡路大震災とその後に起こった神戸連続児童殺傷事件をきっかけとし、「心の教育」の充実を図る目的で立ち上げられたものです。体験を通して子どもたちが自ら体得する場や機会を提供し、生徒一人一人が自分の生き方を見つけるよう支援していく、というものです。

その活動に共感した三本木中学校では、取組2年目となる平成11年に職員を兵庫県へ派遣し、その優れた試みを学んできました。その後、学校の置かれた状況を勘案しつつ、地域の実情に合った活動のあり方を検討した上で、平成12年より『三中トライやるウィーク』を独自に立ち上げたのです。当初は中心的なねらいが「心の教育」だったこともあり、主担当

を道徳指導部に位置づけ、実施に向けての準備に取りかかりました。初年度は、教職員、ＰＴＡ、地域への周知と理解、そして、受け入れ先事業所探しに奔走しました。会議や集会を開き、理解を求め、市内の事業所に足を運んで活動事業所を確保しました。

この活動を行って　成果・課題、そしてこれから

この活動を通して、子どもたちは確実に変化しています。保護者の方々に話を聞くと、「返事や挨拶がはっきりし、言葉遣いがよくなった。家での会話が増えた。」という声がよく聞かれます。学校でも同様の変化と意欲的な行動が見られます。また、子どもたちと関わった地域の方々がその後も三本木中学校を気にかけてくださるため、生徒たちは地域からも見守られている意識を持ち、安心できる環境のもと、責任感にも似た自信を持って生活できています。

『三中トライやるウィーク』を進めていく中で、９年目になる現在では、職員、生徒、保護者、地域に広く認知され、キャリア教育の一環としても重要な取組となっています。関係者の中には、５日間は長すぎる、もっと期間を短くし簡素化できないかなどの声があるのも事実ですが、総合的な学習の３年間を見通しての学習計画（教育課程）の中に位置づけられ、５日間だからこそできる体験があると考えています。５日間の本物体験。活動中には楽しいことも、辛いこともあるでしょうが、それら一つ一つが色々な面で子どもたちを育てる貴重で、重要な学びの場となっているのです。

共に学び、共に高めあう

◆ 母校に！地域に！学習支援ボランティア！ ◆

県立七戸高校・七戸中学校・城南小学校　学習支援ボランティア

この取組を紹介したわけ

七戸町は、町ぐるみ教育推進委員会を設置し、町全体で地域の連携に取り組んでいます。いろいろな取組を積極的に行い、地域の発展を進めている中、県立七戸高校と七戸町立七戸中学校の両者の思いが一致した一つの取組として、３年前に学習支援ボランティアが始まりました。その後、この取組は城南小学校への学習支援ボランティアへと広がり、現在に至っています。

地域が連携して子どもたちを育てようという思いが町の中にあふれている七戸町で、高校生が地域貢献という願いを込めて、母校の中学校や近隣の小学校に出向いて、学習のお手伝いで頑張っています。同じ町の中にある学校が互いに手を取り合って、共に学び、共に高めあおうとしている活動です。

このような活動です

夏休みに行われる、七戸中学校と城南小学校の学習会に、七戸高校の生徒が学習支援ボランティアとして参加します。また、七戸中学校には、部活動支援ボランティアとしても参加します。

七戸中学校での学習支援ボランティアは、七戸中学校で夏休み中に行われている英語と数学の３年生の学習会（希望制）に３日間、それぞれ２～４名の七戸高校の生徒が参加します。１クラス３０名程度教室の中で机間巡視をしながら学習支援をしたり、丸つけをしたりします。学習会の進行・指導は中学校の教師が行い、七戸高校生は、補助という形ですが、日に日に中学生と高校生がうちとけ、高校生が気軽に声をかけたり、中学生が手をあげて高校生を呼んだりする姿が見られるようになります。

夏休みの前半に行われる３日間の学習会で英語を支援し、後半の３日間では数学を支援しています。また、一昨年は同時期にサッカー部とバスケット部の部活動支援も行いました。

城南小学校での学習支援は、夏休みに行われている５年生のサマースクール（学習会）に

３日間学習支援ボランティアとして参加します。主にドリル学習の丸つけの手伝いや子どもたちへの解説を行います。中学校の学習支援と同じように学習会の進行・指導は小学校の教師が行い、七戸高校生が児童への個別支援を行います。

１クラスに入る学習支援ボランティアの数は２～３名で、国語、算数、理科、社会の４教科の学習会で支援を行います。

子どもたちにはわかりやすいと、大変好評な活動です。

このような活動です

七戸高校は進路指導主任が窓口となっており、七戸中学校は教頭と３学年主任、城南小学校は教頭と５学年主任が連絡と調整を行っています。

学習支援ボランティアは、現在のところ七戸中学校と城南小学校の学習会の日程に合わせる形で活動しています。七戸高校の２学期始業式が小中学校より早いため、小中合わせて６日間しか支援が受けられないのですが、日程が合うのであれば、もっと日数を増やしたいと思っています。

「七戸高校の学習支援ボランティア」は、将来教職や青少年指導に当たる人材を育てるという目的もあります。生徒たちは、そのため事前に学習支援をする意義を十分に理解してボランティアに臨むことになります。

中学校を担当する生徒は英語、数学といった得意教科を担当するので、事前の打合せは比較的簡単に済みますが、小学校は支

（第４号）　七戸町地域教育力向上協議会・情報紙 2008年（平成20年）8月5日　火曜日

七戸町学校支援ボランティア

毎年夏季休業に入ると、七戸町内の小中高の学習交流が行なわれ、今年で3年目になります。今年度も七戸高校生徒による学習支援・部活動支援ボランティアが、母校である城南小学校や七戸中学校を訪れて小中学生の勉強をサポートする計画が立てられ、7月23日の七戸中学校英語教科を皮切りに始まりました。24日は、七戸高2年の市ノ渡みなみさんと久保田エリナさんが七戸中を訪れて、高校受験を目指している中学生35人を相手に、マンツーマン指導で熱心にサポートしていました。この後も、別の高校生による数学教科のサポートも予定されている。

終了後、感想を求めると市ノ渡さんは「緊張しましたがとてもいい経験になりました。私たちが教える立場でしたが、中学生の皆さんからたくさん教わることもたくさんありました。」久保田さんは「とてもいい経験になりました。将来に必ず役に立つと思います。時々、上手に教えられなくて困ったこともありましたが、楽しかったです。」と笑顔で感想を語ってくれました。

また、高校生の指導に当たっている、七戸高校進路指導部長の鳥谷部陽一郎教諭は「高校の教育の成果を地域に還し、生徒の経験の幅を広げる場と考えています。力のある生徒を育成し、今後も継続できればと考えています。」と力強いコメントをいただきました。（倉本　貞）

『共に学び、共に高めあう』七中生・七高生

援が４教科に及ぶので、あらかじめ小学校で用意した分厚い教材を渡されます。また、この事業は青森県で行っている『高校生スキルアッププログラム』と連携して実施されています。

また、学習支援と並行して七戸中学校で部活動支援も行われます。一昨年は、夏休み中にサッカー部とバスケットボール部の活動に参加し、中学生に技術の指導や部活動に対する心構え、高校生としての経験を伝えました。学校と地域の連携は、七戸町をあげて進めており、町としての振興計画や学校支援地域本部事業にも早くから積極的に取り組んでいます。この取組は、七戸町地域教育力推進協議会の学校支援ボランティア事業の一環としても行われています。この活動が円滑に進んでいる要として、高等学校、中学校、小学校を結びつけるコーディネーターの積極的な活動があり、毎日のようにそれぞれの学校や地域を訪れ、今必要なことをどのように結びつけ取り組んでいくかに奔走しています。

ここが聞きたい　お答えします

Q：　この取組が今順調に進んでいる要因は何ですか。

A：　七戸町の地域に対する政策、特に町ぐるみ教育推進委員会の設置。そして、この取組に係わっているすべての人の思いと情熱、特に、七戸高校、七戸中学校、城南小学校のそれぞれの思いが一致していることがあげられます。七戸町の応援とすべての人の連携が大切だと考えます。

これまでのみちのり

この活動の発端は、七戸町が町の振興と発展を考えて、町ぐるみ教育推進委員会を設置し、学校を含めた各団体や各組織にはたらきかけたことがきっかけとなります。

七戸中学校の校長は、学校力を向上させるためには、是非七戸高校と連携を取りたい、先輩の活動を目の当たりにするだけでも意味があるとの思いを持っていました。同様に、そのときの七戸高校の校長先生も地域に貢献したい、学習、部活動で連携を取りたい、もっと七高生を成長させたいとの思いがあり、両者の思いが一致して活動が始まりました。

七戸高校と七戸中学校の間で学習支援ボランティアが始まったのは、今から３年前になります。内容は学習支援ボランティアと部活動支援ボランティアで連携を持つことになり、中学校は活動の日程と内容について企画し、高校は支援ボランティアを行う際の、生徒の活動ルール作りを行いました。学習支援ボランティアは中学校３年生の学習会に、高等学校３年生が支援するかたちで始まりました。

（現在は高校２年生が支援しています。）その翌年、同様に夏休みに学習会を行っていた、城南小学校から要望があり、支援が始まり現在に至っています。

学習支援ボランティアは今年で３年目となりましたが、今年、学習支援に参加した高校２年生の生徒が３年前に七戸中学校の３年生で学習支援を受ける側だったのです。その時、「私も、もし七戸高校に入学したら、母校に教える側として来てみたいな」と思ったそうです。その時の思いが、今年実現したといって大変うれしそうに語ってくれました。

今まで、大きな問題や課題はありません。取組当初は高校生と中学生が接することによるマイナスの面も心配されましたが、そのようなことは全くありませんでした。高校生にとても好感をもち、理解も深まっており、高校生たちも教える充実感を味わっているようです。

この活動を行って　成果・課題、そしてこれから

この活動を通して、教える側、教えられる側の双方に得るものがあります。

教えられる側としては、学力（学校力）が向上しました。点数の面での学力だけではなく、いろいろな人とのふれあいの機会を持つことによって、学習、部活動、すべての学校生活において頑張ろうという意識が向上し意欲的になります。

教える側としては、教えることの達成感や教えることのよろこびを感じることができ、将来の進路選択をする上で、この経験が役立ち、さらに、教職を目指す子にとってはスキルアップになります。また、七戸高校が地域に貢献することによって、七戸高校のＰＲになりました。

今後、よりよい活動にしていくためには、各校間の連絡・調整の回数を増やし、教える側の高校生が、①教える立場として、高校生であるけれども、先生と呼ばれるのにふさわしい態度・考えを一層身につけること、②高校生が持っている力をもっと出せるような学習形態や内容の工夫、③実施時期や実施期間そして実施教科の検討などが考えられますが、現在の活動を維持するための努力をしながら、次の段階に進めていきたいと考えています。